

『罪と罰』の舞台を訪ねて

人間の行為の善悪について重い問いかけ

「一つの小さな罪悪は百の善行によってつぐなわれる」

「選ばれた非凡人は、世のため社会のためにそのお金を使うならば、社会的に無価値な人間を殺して金を奪うこともできる」

——主人公ラスコーリニコフの“殺人哲学”は不合理と不平等が消えていない現代社会でも共鳴する若者がいるかもしれない。ドストエフスキーの大作『罪と罰』が問うているこの重い投げかけを胸に、私は作品が執筆された1865年から約1世紀半後の小説の舞台を訪れた。2011年6月15日、“事件”の起きた7月初めにほぼ近い「白夜」のサンクトペテルブルクの大地に立った。

★ ★ ★ ★ ★

——暑い7月初めの夕方、ラスコーリニコフは金貸しのアリョーナ婆さんの部屋に行く。殺人計画の最後の瀬踏みだった。(以下、引用は光文社文庫・亀山郁夫訳から)

「距離はいくらもなかった。家の門から何歩かということも知っていた。ちょうど730歩だった」

「かれこれ11時近くだった。この時期にペテルブルグは、真っ暗な夜が訪れることはなかったが、それでも階段の上のほうはかなり暗かった」

「そこで、はっとわれに返った。<<あれの後だと！>>ラスコーリニコフは、ベンチから飛び上がりながら声をあげた。<<だが、はたしてあれをやるのか？ほんとうにやる気か？>>」

「<<ああ！>>と叫んだ。<<ほんとうに、ほんとうに斧をつかみ、あいつの頭をぶち割る気であるのか、あいつの頭蓋骨を粉みじんにしてやるつもりなのか・・・なまあったかい、べとつく血の海に足をすべらせながら、錠前をこわし、金品を盗み、ぶるぶる震えているのだろうか。体じゅう血まみれのまま、どこかに身を隠すのだろうか・・・斧を手にしたまま・・・ああ、ほんとうにその気なのか？>>そうつぶやきながら、木の葉のように震えていた」

ラスコーリニコフの心は動揺する。でも、彼の哲学に殉ずる友人の言葉に“あれの行為”への確信を深めていく。

「・・・もしかしたら、何十という家族を、貧困や、崩壊や、破滅や、墮落から、そう、性病院からも救い出せるんだ。ばあさんのあの金があれば、それがぜんぶできる。・・・ひとつのちっぽけな犯罪は、何千という立派な行いでもって償えないもんかね。たったひとつの命とひきかえに、何千という命を腐敗や崩壊から救えるんだぜ。ひとつの死と、百の命をとりかえっこするんだ。・・・あのばあさん、有害だもんな。・・・」

「彼は一心に斧に飛びつき（それは斧だった）、腰掛の下の、二本の薪の間におさまった斧を引きずり出した」

「・・・ことなく両手で斧を振り上げると、ほとんど努力もせず、ほとんど機械的に、脳天めがけて斧の峰を振り下ろした。まるで力が抜けたみたいなき感じだった。だが、いったん斧を打ち下ろすと、たちまちからだのなかに力が湧いてきた」

犯行後、ラスコーリニコフの心には思いもかけなかったさまざまな考えが浮かんできた。ともかく現場から逃げた。幸いに途中、誰にも顔を合わすことなく自宅のアパートにたどり着くことができた。

「窓際に走りよった。明るさは十分だった。すぐさま頭から足の先まで全身を見まわし、血の跡はないか、着ている服までくまなく調べ始めた」

「・・・どうしようもなく苦しみがつのってきた。<<なるほど、もうはじまっているのか、ほんとうにもう、罰がはじまっているってことか?・・・>>」

「警察へ・・・<<質問されたら、ひょっとして答えてしまうかもしれない>>警察署の建物に近づきながら、そう思った」

「エカテリーナ運河の河岸通りを、かれこれ半時間ほどうろつきまわっていた」

「V通りを、ネヴァ川に向かって歩き出した」

こうして彼の懊悩と精神の放浪が始まったのだ。

私は登場人物の主人公ラスコーリニコフ、アリューナ婆さん、その後ラスコーリニコフの魂に決定的な影響を与える娼婦ソーニャの家を訪ねた。また主人公がたびたび訪れたセンナヤ広場、そして最後にドストエフスキー博物館も訪れた。

ラスコーリニコフの下宿はグラスダンスカヤ通りとストヤルネペリュード通りの角にある灰色の壁の4階建ての建物だった。作品が書かれた時代には、この周辺は居酒屋的な飲み屋街だったようだ。今は通りに野菜や肉、雑貨を扱う小さな商店がいくつか軒を並べている。ときどき車が通る。午前10時。街は閑散としていた。

残念ながら、主人公が下宿していたという4階の部屋には入れなかった。気がついたのは、1階の道路向けの外壁に貼られていた小さな掲示板。「1824年、ネヴァ川の洪水で水位がこの位置（海から4メートル）まで高くなった」。約200年前の記録だが、はからずも先の東北地方沿岸を襲った津波のことが、ふっと脳裏に浮かんできたのだ。

かつては「エカテリーナ運河」と呼ばれていたグリゴエドフ運河沿いの道路の一角104番には、金貸しのアリューナ婆さんの家があった。今は明るい黄色の壁で、1階には旅行会社と食料品店がある。“事件”はこの3階で起こったが、昼間の明るい周囲の光景からは、あの陰惨な情景はなかなか浮かんできにくい。

同じ運河沿いの73番には、売春婦ソーニャが住んでいた。あまりにも純な彼女の信仰心に感化され、最終的にラスコーリニコフは自首を決意した。アパートは薄い黄色の外壁。ここも今は無断で中に入ることはできない。

運河通りを、昼間でもライトをつけた車が、かなりのスピードで行き交っている。両側

には 1 メートル半ほどの石畳の歩道。運河に降りていく階段には、大きな袋を前に置いた老人が寝ていた。ホームレスだという。今も作品の描かれた当時に通ずるものがある社会に何かを考えさせられる。

ラスコーリニコフがたびたび通っていたセンナヤ広場は 13 番にあった。ソ連時代には名称が「平和の広場」となったのだという。途中で雨が少し降ってきた。ガイドによれば、このところ 3 日間ほど雨が続いて降っているという。日本の梅雨のような感じもある。

センナヤ広場から地下鉄に乗ると、次の駅が「ドストエフスキー駅」だった。カメラマンの N 氏とガイドと私の 3 人は通りの 5 番、ドストエフスキーが最後に住んでいた家・博物館に足を運んだ。ここで「カラマーゾフの兄弟」などの長編が執筆されたという。

翻訳者・亀山郁夫氏の読書ガイドによれば：

ドストエフスキー自身は、およそ十年にわたるシベリアでの懲役生活を終え、モスクワ、そして首都ペテルブルグへと戻ってきた。小説にはモデルとなった事件があり、ドストエフスキーは、主人公による金貸し老女殺害に社会的心理的肉付けを行うため、都会に巣くう病弊をこと細かに再現していった。

『罪と罰』は、いうなれば、運命の書である。ラスコーリニコフは、重なり合う様々な偶然によって、ついに犯行の現場へと導かれていく。彼の脳裏にまとわりつく「殺人」という妄執はいくつかの偶然が重なって実行された。かりに、母と妹のペテルブルグ到着が一日早ければ、状況は別のものとなっていた可能性もある。

そして物語の終盤、主人公の魂は売春婦ソーニャによって清められていく。

「たんにシラミをつぶしただけじゃないか、ソーニャ、なんの役にも立たない、けがらわしくて有害なシラミをさ」

「だいたい、ぼくはあのばあさんを殺したんだろうか？ ぼくは自分を殺したんだ、ばあさんじゃなかった！ あのとき、ぼくはほんとうにひと思いに自分を殺してしまった、永久に・・・あのばあさんを殺したのは悪魔で、ぼくじゃない・・・」

「・・・いますぐ、いますぐ、十字路に行ってそこに立つの。そこにひざまずいて、あなたが汚した大地にキスをするの。それから、世界中に向かって、四方にお辞儀して、みんなに聞こえるように、『わたしは人殺しです！』って、こう言うの。そうすれば、神さまがもういちどあなたに命を授けてくださる・・・」

ソーニャを見つめながら彼は、自分に注がれている愛がどれほど大きなものかを感じることができた。

——私は高校時代、国語の担任の先生に勧められて、夏休みにこの『罪と罰』を読んだ。今も日本では、学生の夏休みに読書感想文を書くための推薦図書として毎年挙げられている。数多い世界の名作の中でも、テーマの深さとスリリングなストーリーの展開では最高

峰に属しているものではないかと思う。

訪口に当たって、私は今をときめくロシア文学翻訳家で東京外国語大学学長でもある亀山郁夫氏の翻訳に再び目を通した。

舞台となったサンクトペテルブルクはかつて帝政ロシアの首都だった。ソ連時代にはレニングラードと改名され、再びサンクトペテルブルクへ。この間に、政治も社会体制も経済機構さえもすっかり変わってしまった。だが、大きな石造りの家並みや道路、運河の陰影は歴史の変転に流されることなく今なお残っている。

作品が投げかけているテーマは、何世紀たっても変わることのない人間の本性と社会の矛盾をも突いている。人間回復へのヒューマニズムが描かれた『罪と罰』は、いつの時代にも読者の魂を奥深いところで揺さぶっていくように思われる。